

2007 年度夏学期 歴史 I (月 3)

このシケプリは 2007 年度入学文Ⅲ14 組のために作成されたものです。
授業の内容を、時系列順に整理し（一部を除く）よりわかりやすいように詳細な補足を加えてあります。
間違い等がありましたらシケ対まで。

導入 -初回授業でのお話より-

[imperium] imperator = 支配、命令権 “emperor” の語源。
史上初の”グローバルな帝国”であった、ローマ帝国の歴史を追う。

■ グローバルな帝国

ローマ帝国の成立は前 146 年。
短命だった古代の諸帝国に比べ、ローマ帝国は長い間繁栄した。
その長い安定期の間に、ローマ帝国はグローバル化を推進していった。
歴史上初めてグローバル化を推進した国家である。
ローマ帝国について考える事は、世界史を考える上でも、globalization が急速に進みつつある現代社会を考える上でも、重要な意味を持つ。
グローバル化のメリットは？デメリットは？
例えば、ローマ帝国時代に行われたキリスト教の国教化について考えてみよう。

■ 多神教から一神教へ

エジプトやギリシアの神話には多くの神々が登場する。
古代西洋は、多神教世界であった。
一神教であるユダヤ教は迫害されていた。
ユダヤ教…前 6 世紀、ヘブライ人が創始した民族的一神教。
唯一神ヤハウェを礼拝し、一切の偶像を否定する。
その唯一神観や終末思想は、キリスト教やイスラーム教の成立にも影響を与えている。

その後、ローマ時代に出現したのがキリスト教である。

キリスト教は成立当初は「ユダヤ人の異端派」という程度の認識しかされていなかったが、3世紀頃から本格的に頭角を現し始めた。

今までは多くの神を認めてきたローマ帝国は、ユダヤ教と同様にキリスト教を迫害していた（実際に迫害されていたかどうかは定かではないらしい）が、キリスト教信者の増加を食い止められず、ついには国教化してしまった。

これは、多神教から一神教への、まさに歴史的な大転換であった。

なぜキリスト教はユダヤ教より広がったのか？

選民思想のため、布教に熱心でなかったユダヤ教徒に対し、

キリスト教徒は布教に熱心だったから、等の理由が挙げられる。

その後7世紀に成立したイスラーム教も、布教に熱心な一神教であった。

多神教から一神教へ——この大転換は人類の歴史上、非常に大きな意味を持つ。これは、農業革命や産業革命に匹敵する大変革である。

歴史上類を見ない程長い安定期、「パックス・ロマーナ（ローマの平和）」や、多神教世界から一神教世界への大転換など、ローマ帝国について考えるべき点はたくさんある。

興亡の世界史、という観点から考えても、ローマ帝国史は非常に重要だ。

「ローマの歴史の中には人類の経験全てが詰まっている」

——丸山真男

宗教は規格化されるべきか？グローバル化は推進されるべきか？

その答えは、もしかすると、ローマ帝国の歴史の中にあるのかもしれない。

ローマ帝国。興亡とその「歴史的うねり」を追う。

1. 世界帝国の原像を求めて -古代オリエント世界-

※ 前1000年頃からヘレニズム時代にかけての、オリエント世界の勢力の変遷をまとめました。

ローマ史も組み入れて完璧な時系列順にしようと思ったのですが、ここにローマを組み込むとややこしくなるので便宜上オリエントはオリエントで独立させています。この構成だと、あたかもアッシリアがローマよりずっと昔の帝国だったかのような感じがしますが、そんなことはないです。アッシリア時代にローマは建国されています。一応ところどころにローマとの時系列の繋がりを**太文字**で散りばめておいたので、くれぐれも勘違いしないようにしてください。わかりにくくてごめんなさい。

■ 前1000年頃の混乱

前12c頃、東地中海に「海の民」が出現した。

「海の民」…この頃東地中海で活動した諸民族の総称。民族系統不明。

「海の民」の活動によって、ミケーネ文明の崩壊、ヒッタイトの滅亡、エジプト新王国の滅亡（以後、ヒッタイトが独占していた鉄器技術が各地に伝播した）などの事態が引き起こされた。

特にヒッタイトとエジプトの衰退は、東地中海における新たな動きを生んだ。大国の没落。そんな中で出現したのが騎馬遊牧民である。

■ 騎馬遊牧民の出現

ばらばらだったオリエント世界が統合していく契機となったのが、騎馬遊牧民の出現であった。

ユーラシア地域では古くから馬の家畜化が進んでいたが、その頃はまだ乗馬の風習はなかった。

BC10c頃、内陸アジア・西南アジアの乾燥地帯で馬具（金属製の「はみ」など）と騎馬術が考案された。

その結果、馬を軍馬として利用し、農耕地帯への侵入・略奪を繰り返す騎馬遊牧民が出現した。

騎馬遊牧民の出現は、「定住民の文明」に対する挑戦であったといえよう。

授業で紹介された騎馬遊牧民：

スキタイ…前7c頃勃興。ギリシア植民市とも交流があったと伝えられる。

青銅製の武具・馬具や、金細工が発達（独自のスキタイ模様）

ヒクソス…前1650年頃、中王国時代のエジプトに侵入しこれを支配した。

テーベ第18王朝により撃退されるまでエジプトを直接統治した。

ヒクソス侵入以後、エジプトにも騎兵が登場するのは、
騎馬遊牧民に対抗するには馬しかないという事の現れだろう。

■ アッシリア -強権の帝国-

シュメール人が建設したアッシュールという都市国家が起源。

西アジアの通商路上に位置したため発展し、領域国家にまで成長した。

遷都が多かったが、代表的な首都はニネヴェ。図書館が有名である。

アッシリアは、「海の民」がもたらした大混乱に、逆に応戦していく形で勢力を拡大していった。

前744年から前705年にかけて領土拡大が進み、「肥沃な三日月地帯」から、小アジア全体へと拡大した。**(前753年、ローマ建国。ただし、伝承による)**

交易と商業の伝統→軍国主義へ。

アッシリアの軍事力には馬が大きな役割を果たしていた。

騎馬遊牧民に対抗するためには馬で対抗するしかなかったのだろう。

- ・ 大型戦車の使用
- ・ 力の強い大型の馬を育成（生産育成の技術）
- ・ 騎射の技術

こうして、騎馬遊牧民に対抗していくうちに技術が向上していった。

強大な軍事力を背景に、押さえつける支配体制がしかれた。

そのため、「強権の帝国」と呼ばれる。

被支配民族の強制移住を繰り返し、最初の世界帝国を実現した。

世界帝国の実現により、国際商業ネットワークが成立し、国際交易が拡大した。

しかし、軍隊の残虐さと過酷な税は被征服民の抵抗を招き、結局崩壊した。

アッシリアの滅亡後、オリエントは四帝国分立時代と呼ばれる時代に突入する。

四帝国とはすなわち、エジプト・メディア・リディア・新バビロニアの四帝国である。

■ アケメネス朝ペルシア -寛容の帝国-

前550年成立。(前509年、ローマが共和政になる)

印欧系パールサ人の国。同系のリディアを打倒し、ペルシア帝国となる。

首都はペルセポリス。王権が絶大で、中央集権体制による帝国支配が行われた。

「王の道」や駅伝制の整備により、通信網が発達した他、サトラプ（総督）、王の目（巡察官）、王の耳（密偵）が各地に派遣され、中央集権的な地方行政が行われた。

アケメネス朝はアッシリアとは違って、被征服民に対して非常に寛容であった。軍役と貢納義務さえ果たせば、被征服民の宗教・文化・制度などを尊重した。そのため、「寛容の帝国」と呼ばれる。

その寛容さの例の一つとしてあげられるのが、アラム語の公用化である。

アラム語はアラム人によって用いられた言語である。前1000年紀後半には楔形文字に代わって全西アジアの国際共通語になった。

アラム語と共に広まったアラム文字は、22の子音を持つアルファベットである。

前2000年紀後半からの時期はアルファベット開発期。様々なアルファベットが生まれた。

アルファベットは、コンピューターの発明どころではない、偉大な発明であった。

そして、これと同時期に一神教が誕生した。地中海とオリエントの二重の大変動である。

ちなみに、イエス＝キリストもアラム語を使っていたらしい。

アケメネス朝の征服地はセム系ばかりで、アラム語が公用語であった。

それでもアラム語を公用語として認めたペルシア人は寛容である。

アラム文字も採用された。アラム語とアラム文字は当時事実上の国際共通語だったため、諸民族の交流がさらに盛んになった。

ペルシアはアレクサンドロスによってダレイオス3世時代に滅亡する。

アレクサンドロスがいなければ、ペルシアはもっと続いていただろう。

■ アレクサンドロスの帝国

辺境のマケドニア王国は、ギリシア人からバルバロイ扱いされていた。

ドーリス系王朝のエトノス国家（村落の集まり）で、農耕と牧畜の社会。

古代ギリシア文化を輸入して国力養成。

前4世紀にフィリッポス2世が登場（この頃ローマでは貴族と平民の闘争が激化）

軍事力強化が図られた。→騎馬軍団とサリッサ（長槍）による戦術の導入
こうして強大化したマケドニアは、経済的にも強大化した。

前338年、ギリシアとの間に戦いが勃発（カイロネイアの戦い）
古代ギリシア最大の弁論家デモステネスはギリシアの民に「アテナイ人はマケドニアに徹底的に応戦せよ！」と呼びかけたが、ギリシアは敗北。
結果、マケドニア王のギリシアに対する覇権が確立し、ギリシアのポリスは事実上自治を失う事になった。
（ちなみに、ギリシアは前2c頃からローマの支配下に入る）

フィリッポス2世暗殺後、息子のアレクサンドロスが王となった。
前334年、東方遠征開始。
前333年、イッソスの戦い
アレクサンドロスはダレイオス3世率いるアケメネス朝ペルシア軍を撃破、シリア・エジプト征服への道を開いた。
その後、エジプトを征服してアレクサンドリアを建設。
前331年、アルベラの戦いでダレイオス3世を決定的に撃破（翌年、アケメネス朝ペルシアは滅亡する）
その後ソグディアナを征服し、ついにインドにまで到達するが、部下の反対にあって引き返した。

東方遠征によってアレクサンドロスは空前の大帝国を作り上げた。
コイネー（共通語）を用いてギリシア文化を広め、ヘレニズム世界を成立させた（オリエントのヘレニズム化、またはギリシアのオリエント化）
帝国は専制君主制（オリエント的帝国支配の継承）で、
ギリシア人を中枢においた、ペルシア人官僚中心の統治体制であった。

アレクサンドロスは、インドからの帰路の途中、熱病にかかってバビロンで息を引き取った。
その後の後継者争い（ディアドコイの争い）で国力は低下し、結局はバラバラになってしまう。
（その一つ、アンティゴノス朝はのちにローマに敗れる）

アレクサンドロスの帝国は、広さはまさに前代未聞のものであったが、所詮は野望の帝国。一世代で崩壊してしまった。

ここで、なぜローマは滅びなかったのか、という問いが浮かび上がる。

古代オリエントの大帝国は何がいけなかったのか？

ローマ史を考える際に、まずそこから考えてみるのも一つの道である。

以上が、授業で取り上げられたオリエント史の概説です。

この間にローマは建国され、共和政を実現し、法整備を整えていきました。

今から解説するのは、建国からのローマの歴史です。

以下、ほぼ全て時系列順に解説していきます。

ちなみに…

その後のヘレニズム期は比較的勢力均衡。300年間の平穏期が続いた。

その長い平穏期の間にアショーカ王の伝道活動などが行われた。

イエスはもしかすると、仏教に触れたかもしれない。

2. 建国から共和政開始まで

■地中海人種（先住民）——[母権制社会]

コーカソイドに属する白色人種で、黒髪黒眼。

奴隷制に基づく母権制社会が特徴である。

北アフリカ：ベルベル人（セム・ハム系）

イベリア半島：イベレス人（バスク人と近い？）

シチリア島：シカニア人（イベリア系）

エリュモス人（小アジア系）

シケリア人（イタリア系）

サルデーニャ島：サルドイ人

イタリア半島トスカナ地方：エトルリア人（小アジア系？）

■印欧系諸民族の移住——[父権制社会]

ケルト人（イベリア半島、フランス、イギリス、アイルランド）

古イタリア人（Italiei）：

ラティーノ・ファルスキー系 → ラテン人 → ローマ人

ウンブロ・サベリー系（山岳系）

ウェネト・イリュリー系

後から来た人々は、先住民に阻まれ、なかなか半島の南へ行けなかった。

■エトルリア人とローマ人（トロイア人の末裔を自認）

ヴィイラノヴァ文化（初期鉄器時代）＋ オリエント化 ＝ ”ラセンナ”

ローマは前753年、ロムルスとレムスによって建国された（伝承）

ティベル河畔の小都市国家としてスタート。

その後、エトルリア人の都市国家と海上交易する事によって勢力圏を拡大した。

↓

前7cに最盛期。王政の12の都市国家が分立し、ローマをも一時支配したが、

前5c以後衰退、BC3cにローマに滅ぼされた。ギリシア文化の影響を受けており、

衣服、官制、習慣など、ローマ人に与えた影響は大きい。

初期の政治体制は王政。ローマ人とサヴィニー人との戦いが続いたが、争いの末、共存を目指す支配体制がとられたようだ。

ただし5、6、7代はエトルリア勢力に覇権を奪われた。

この時の経験からか、ローマ人は伝統的に王や独裁者を毛嫌いする。

この事は、後に扱う大スキピオの失脚にも関連する。

前6c後半、著しい都市形成と住民の拡大再編成が行われた。

(ex. 城壁建造、クラシス・ケントゥリア制、トリプス区分、重装歩兵密集隊)
領域拡大と市民団の増大が続き、ローマは強大化していった。

そして前509年、ローマは王政から共和政へと移行する。

3. 共和政国家ローマ

S. P. Q. R (Senatus Populusque Romanus)

共和政ローマは法の社会。だからこそ強大化し、長く続いたのだろう。

Civitas (市民団) = Res Publica (国家=共和政)

法 (jus) と習俗 (mores) → 法律 (lex data) と祖先の威風 (mos majorum) が重視される。

■ 身分闘争と軍国主義

共和政とはいっても、初期は貴族社会であった。当然平民はこれに反発し、パトリキ (貴族) とプレブス (平民) との間の身分闘争が激化していった。その間、重装歩兵として国防を担ったプレブスの役割は大きい。

ポリス (農耕市民の戦士共同体) における軍国主義 (共和政ファシズム国家)
ローマ市民は全てが軍人であり、兵員会という民会に属していた。

(ちなみにこの頃ローマに奴隷制は定着していない。奴隷制については後述)

軍国主義国家ローマは、周辺諸勢力の制圧を進めた。

→ラテン人、サビニ人、アエクイー人、ヴォルスキー人、エトルリア人
ローマが周辺諸勢力を駆逐していく中で、前390年、ケルト人が半島に侵入。
ローマ人はケルト人に敗北した。(連戦連勝者の不名誉なる屈辱)
最終的にケルト人を追い払ったカミルスはローマの第二の創建者と讃えられた。
続いて前343年、第一次サムニウム戦争。サムニウム戦争は304年に終結するまで三次に渡って戦われた戦争で、古代イタリアの民族の一つ、サムニウム人との間に勃発した。ローマの軍道アッピア街道はこの間に建設された。
アッピア街道は、ローマの対外攻撃性を現している (ギリシアと対照)

続いて、タレントゥム戦争 (ローマとタレントゥムとの間の戦争) の勃発。
スパルタの植民市タレントゥムは商工業が盛んな有力都市で、前 4c には
マグナ=グラキアの指導都市として栄えた。

マグナ=グラキア・・・ギリシア語で「大きいギリシア」の意。南イタリアにあった

古代ギリシアの植民市の総称。ギリシア文化をローマに
伝えるのに大きな役割を果たした。

タレントゥムは前 272 年、エペイロス王ピュロスの援助を受けローマと戦ったが、敗北し占領された。

ちなみに、エペイロス王ピュロスは敗北後、ローマの元老院を「王者の集まり」と表現した。一人の王ではなく、複数の優れた統率者による政治（＝元老院制度）、これはローマの特色のひとつである。

このような戦乱を背景に、重装歩兵として国防を担ったプレブスの発言力が増していく中で、十二表法（前 450 年）、リキニウス・セクスティウス法（前 367 年）、ホルテンシウス法（前 287 年）と、法制定によって身分闘争は解決していった。ローマは法の社会。身分闘争は法により解決された。

■ 共和政ファシズム国家論（１）-国家主義と軍国主義-

※ 去年の論述のテーマはこれでした。本村先生のローマ史の中核となる考え方なので、かなり重要かと思われます。

ローマ人は「自分たちはエトルリア人の王を追放し共和政国家を樹立した！」という自負が強く、かなり[近代的]といえる国家観を持っていた。

同じ国家観を持つローマ人ひとりひとりが、「ローマ人」としての誇りと自覚を持っていた。（国家-res publicaへの自負）

近代的な国家観＝祖国に対する強烈な意識 → 国家主義

その意味で、ローマ人は初めて近代的な「国家」を作った民、といえる。

「ローマ国家は古来の威風と人から成る」 ——キケロ『国家論』

つまり、古来の威風によって行動規範を鍛えられた人間によって国家は成る、ということ。

ローマ人は父祖の威風（mos majorum）を重んじた。

「勇気と名誉はどうあるべきか」「徳(virtue)とは・・・」

「美德を持つということは人間が人間たるべき姿であることだ」

子供たちはそのような物語を聞かされて育った（父祖の威風を刻み込む）

父祖の物語や過去の失敗を教訓として次世代に伝える→教訓的（実用的）歴史

トゥキディデスは『歴史』の中で、アテネがスパルタに敗れた因果関係を重視し、史料を厳密に批判的に取り扱った。この点で、トゥキディデスは近代歴史学の先駆とされる。また、アテネ人の奮起を促したといわれ、教訓的（実用的）歴史の祖といわれている。

ローマは国家主義かつ軍国主義であった。

ローマの軍国主義は軍国美談に代表される。これは日露戦争頃の日本にも通じる。

「ローマ人は平穏なときよりも困難なときの方が信頼できる」

→国民的な好戦性（アッピア街道の例）

（ただし、ここでの好戦性とは野蛮な好戦性を意味しない。

ギリシアのように、防御に徹する事はしない、という事。

国家主義のもと、国のために一致団結して戦う）

また、ローマ人はエトルリア人支配下にあったことのトラウマからか、

独裁政を極端に嫌い（後の大スキピオの失脚などに関連）、

自由を尊重する（ギリシアなどのような、奴隷制に立脚した社会ではなかった。

ローマで奴隷制が広まったのは属州獲得後）

300 年の平和の中で、領土が広がっていく中で、ローマ人はローマ人としての自覚と誇りとを高めていく。

■共和政ファシズム国家論（2）-ローマ人と宗教-

ローマ人を支えた精神的支柱は宗教であった。

ローマ人の宗教観とはどのようなものであったのか。

その前にまず、比較の事例として二つの倫理観（？）を取り上げる。

1）武士道（幕末維新期の精神的土壌として）

『葉隠』 「武士道とは死ぬことと見つけたり」

死身に徹するとき、忠も孝もそなわる

自分に勝つ者が他者に勝つ（武力・腕力で勝つのではない）

精神的優位（死の覚悟 → 他者を圧する強さ）

容貌・言語・起居動作 → 礼儀尊重の精神

『武士道』 語らず書かれざる掟（心の肉碑に録されたる律法）

「義」「勇・敢為堅忍の精神」「仁・惻陰の心」「礼」「誠」

「名誉」「忠義」「武士の教育および訓練」「克己」

「自殺および復仇の制度」「刀・武士の魂」

「婦人の教育および地位」

2) プロテスタンティズムの倫理

カルヴィンの予定説（禁欲的プロテスタンティズムの極限として）

恩恵による選びの教説

罪人たる人間は自力（善行・功德）で悔い改めることはできない

「永遠の生命に予定された人々」と「永遠の死滅に予定された人々」

自分がどちらであるかは予め神によって決められていて変えられない。

労働によって神の栄光を実現し隣人愛を実践することで救いを確信し、

天職に専念し無駄な消費をしないこと。（富の蓄積を是認）

人々の倫理観の根底には何がある？

日本の場合は武士道精神であった、と新渡戸稲造は『武士道』の中で説いた。

彼いわく、西洋では倫理観の根底には宗教があって、

宗教が確固たる信念に結びついている（これは一神教世界独特のもの！）

ローマもまた例外ではなかった。ローマ人の信念の根底にも宗教があった。

ポリュビオスは『普遍史』の中で

（いわゆる『歴史』のこと。『歴史』は当時のローマの人々にとっての普遍史だった。

ポリュビオスはギリシア人で、ローマにつれてこられた人質であったが、後に登場する小スキピオの厚遇をうけ、ローマ内を自由に見て回ることが可能だった。どうしてローマは地中海の雄になれたのか。ポリュビオスはローマの興隆していく様子を、普遍史を書くという自覚を持って書き記した。『普遍史』は異国人の目からみたローマ史なのだ）

「ローマは宗教によって他の国にまさる」と書いている。

ギリシア人であるポリュビオスにとって、ローマの人々は敬虔な人々に映ったのだろう。（ローマ人の敬虔さについてはローマ人であるキケロも触れていた）

[ギリシア人とローマ人の宗教的な違い]

ギリシア人 → theoria(ギリシア人の理想的態度) → 思念 → 言説主義
→ 個人救済（祝祭宗教）

個人個人の独立意識が強いギリシアにおいては、

神は個人個人を救うのであって皆を救うのではない（個人救済）

と考えられ、宗教的儀式はカーニバル的なものだった。

ギリシアだけではなく古代オリエントにおいても同じようなことがいえる。

一方、共同体意識の強いローマでは、

ローマ人 → religio (慎み) → 敬虔 → 現実主義
→ 国家鎮護 (祭儀宗教)

「集団が守られていればその中にいる個人個人は守られる」(集団救済)

「神は我々に対して悪意をもたない」という宗教観が根付いていた。

また、ローマにおける宗教的儀式は、セレモニー的なものであった。

そこでは、手続きの厳粛さが徹底されている。

宗教が、市民の生活と意識を公私ともにはっきりと規制しているのだ。

[ユダヤ人とローマ人の宗教的な違い]

ユダヤ人 → ひたすら律法 (トーラー) を信仰の礎としながら選民としての
生活を実践 (選民思想)

ローマ人 → なによりも「父祖の威風」を行動規範としながら恒久の名誉の
ために現世を生き抜く → 現実主義
「天は自らを助ける者を助ける」
「人事を尽くして天命を待つ」

[信仰と労苦]

敬虔なる信仰心 → 神々の世界を人知のおよばぬものとする

「父祖の威風」 → 貴族の反営利主義的な倫理観 (富ではなく名誉を追求)

キケロはローマ人の徳性 (honestum) を以下のように説いた。

理知 (sapientia) 真理の認識と運用

正義 (justitia) 人と人との社会関係にあつて信義に違わぬ

勇気 (virtus) 高潔にして不屈の勇気

節度 (modestia) 行為と言動における秩序と限度、節度と節制

4. ポエニ戦争

西地中海の覇権をめぐるローマとカルタゴとの戦争。

三度にわたって戦われたこの戦争で、多くの敗戦を重ねながらも苦境を乗り越え最終的に勝利することで、ローマはイタリアの覇者から地中海の覇者へと飛躍することになる。

ちなみに、ローマは幾度も敗戦を重ねたが、三度の戦争すべてに勝利している。

■ ポエニ戦争概観

[第一次]前 264～前 241 年

ローマの新設海軍 VS 海軍国カルタゴ

主戦場はシチリア島。

戦後、ローマは初の属州、シチリア島を得る。



[第二次]前 218～前 201 年

別名ハンニバル戦争。

ローマ VS ハンニバル率いるカルタゴ

戦後ローマは西地中海の覇権を確立。

カルタゴは領土のほとんどを奪われ、種々の権利を剥奪された (ex. 交戦権)



[第三次]前 149～前 146 年

小スキピオ率いるローマ VS 繁栄を続けていたカルタゴ

ローマの挑発によって開戦。

戦後、カルタゴは完全な廃墟と化す。

■ 第一次ポエニ戦争

[フェニキア人植民市カルタゴ] (フェニキア人＝ポエニ人)

前 9c にフェニキア商人によって北アフリカに建設された。

発祥の地はビュルサの丘。

商業貿易によって富を蓄積し、前 6c 頃には強力な海運国の首都に発展。

地中海の制海権を握り、栄華を極めていた。西地中海の最有力国。

フェニキアとカルタゴの関係は、イギリスとアメリカのような。

カルタゴはローマに似て（ローマと比較せよ！）貴族の力の強い共和政だったがローマとは異なり民政と軍政が完全に分離されていた。

傭兵中心の軍事力→祖国への忠誠心に乏しい。

[経過]

ローマが南イタリアのギリシア人植民市と同盟を結びその利益を擁護する立場に立つようになると、西地中海のこの二国の関係は急激に険悪なものになった。はじめローマの敗色は濃厚だったが、前 241 年、ついにカルタゴの残存部隊の殲滅に成功。その結果、ローマは多額の賠償金の他に初めての海外領としてシチリー（シチリア島）を入手した。

今までのイタリア半島におけるローマの覇権は市民を送り出して植民市を建設するか他の都市共同体国家との対等な同盟（名目上である場合が多かったが。）によって達成されたものだった。しかし今回のシチリア島は違う。若干の都市を除いてほぼすべてがローマの占領地とされ、税を課され、ローマから派遣された総督の直接統治のもとにおかれた。これが属州-プロヴィンキア-である。

シチリア島にあるフェニキア人植民地パレルモもこの時ローマ領に。

■ 第二次ポエニ戦争（ハンニバル戦争）

史料集 P158-160[ポエニ戦争]参照

まだローマの勢力圏はイタリア半島内にとどまっていた。

カルタゴの拠点現在のチュニジアにあったが、シチリア島を放棄したあとはイベリア半島のカルタゴ＝ノヴァが拠点だった。

イベリア半島のサグントゥムが両勢力の境界だったが、カルタゴが侵犯し、開戦となった。

[経過]

カルタゴは相変わらず海軍力が強大だった。

ローマ側は当初「カルタゴからは海軍が来る」と思っていたが、カルタゴの將軍ハンニバルは象を引き連れアルプスを越え、北ローマに侵入した。

- ・トラシメネス湖の戦い（BC217）

森の中からハンニバル軍登場。ローマ軍壊滅状態。

- ・カンネーの戦い（BC216）

カルタゴ軍の布陣が巧妙だった。ガリア・イスパニア人部隊が最前に配置され、次いでアフリカ人部隊。最後列にカルタゴ人の重装騎兵及び軽装騎兵が配置さ

れた。突撃したローマ軍は「コ」の字型布陣の奥で待ち構えていた騎兵軍団によって壊滅。ほとんど虐殺状態だったと伝えられている。

カルタゴ5万 vs ローマ8万だったのに、大打撃。

これ以降ローマは持久戦をとるようになり、ようやく挽回の兆しが。

-このあとハンニバル一時帰国-

・ザマの戦い (BC202)

カルタゴは諸都市の寝返りを期待したが、結局寝返りはなく、カンネーの戦いから2年程の膠着状態が続いた。

大スキピオ（プブリウス＝コルネリウス＝スキピオ）の登場。

わずか26才だった。ちなみに父ハミルカルが死がきっかけ。

連戦連勝のカルタゴがついに敗れる。以降、完全に弱体化。

ハンニバルは急いで帰国し迎撃したが無駄だった。

■名將ハンニバルとその最期

ハンニバル (BC247-BC183) カルタゴの名將。戦略と戦術に長ける。

統率力と人を引きつける力を合わせもち、その点でアレクサンドロスに通じる。

周りの都市国家を味方につける工作をあちこちでしていた

→外交的かけひきにも長けていた。

そんなハンニバルもザマの戦いで敗れた。財政政策もうまくいかない。

これから、という時に、バルカー族のハンニバルを妬む反バルカ派が現れる。

(反バルカ派は主に貴族。民衆はハンニバルを支持していた。)

ついにハンニバルはカルタゴから亡命するはめに。

地中海をさまよった挙句失意のうちに自殺した。

→ハンニバルは外交に長けた人物であった。周辺地域をみつめる広い外交視野を彼は持っていた。しかしカルタゴの国力回復には失敗し、失地を回復できず、失脚してしまった。

■スキピオとカトー

ローマ存亡の危機を救った大スキピオ（カルタゴを屈服させたため称号を得、スキピオ＝アフリカヌスとなる）（ちなみにグラックス兄弟のおじいちゃん）

将軍にして政治家。名門貴族出身。戦後、元老院の重鎮として権勢をふるう。

救国の英雄となった大スキピオはハンニバル同様、国内で反感を買うようにな

ってしまった。

「スキピオは王になってしまうのではないか？」「個人崇拝になってしまうのでは？」という、貴族たちの懸念。

前 509 年にエトルリア人の王を追放し” Res Publica” を成立させたローマの

誇りからか、ローマ人は王や独裁者を毛嫌いする。それに由来する反感。

また、スキピオは「ギリシアかぶれ」といわれるほど、進取の気進に溢れる人物であった。

←国粹主義的な人々からも反感。「伝統主義に対する冒涇だ！」

国粹主義者カトーが中心となって、反大スキピオの動きが起こる。

そして最終的には、カトーとの政争に敗れ失意のうちに死ぬ。

まるでハンニバル。

[カトー] (大カトー)

共和政ローマ期の政治家・文人。第二次ポエニ戦争に参加。

ローマの質実剛健な伝統的秩序の守護を訴え、中小農民の保護と反カルタゴ政策を主張。中小農民の保護の観点からぜいたくに反対。

当時のローマ社会の退廃を、新来のヘレニズムの風潮によるものだとしてギリシア文化を弾劾。だから「ギリシアかぶれ」のスキピオと対立。

のちに、ある一定の限度まではギリシア文化を認めるようになる。

彼自身、ギリシア語を熱心に勉強していた。

カトーの理念としては、「ギリシア文化はある限度までしか認められない」だったのだが、小スキピオのポリュビオスとの親交などにみられるように、ギリシア文化は知識人層からどんどん入ってくる。ある一定の限度までは、カトーも認めざるを得なかったということ。

その後カトーはカルタゴの脅威にとりつかれていった。

実際に使節としてカルタゴに赴いた彼は、カルタゴ産の高品質なイチジクを持ち帰り「カルタゴは敗戦後 50 年も経たないうちにもうこんなに復興しているんだ！」と繰り返し元老院に訴えた。元老院でのカトーは口を開けば「皆の者カルタゴに攻めこめい！」だったという。

国粹主義者カトーにとっては、カルタゴという仮想敵国が戦略的に必要だったのかもしれない。結果的にカトーの主張は第三次ポエニ戦争で通ってしまう。

■ 第三次ポエニ戦争

第二次ポエニ戦争に敗れたカルタゴは交戦権すら認められていなかった。

カルタゴの隣国ヌミディアはそこにつけこんで、何かとカルタゴを挑発。

耐えかねたカルタゴはローマの許可を得ずにヌミディアと交戦。

そこで待ってましたとばかりにローマは開戦した。

カルタゴは第二次ポエニ戦争敗戦にも関わらず産業・貿易面でローマのライバルだったため。商売敵だった。

小スキピオ（スキピオ＝アエリミアヌス）の活躍により、カルタゴは敗北。

カルタゴの復活を恐れたローマはカルタゴを徹底的に破壊した。

全てを破壊した上、塩をまいて草も生えないようにしたという（今の遺跡はローマ時代に再建されたもの）

これが 146年！！

「いずれその日の来たらん、われらの聖なるイリオスも、プリアモスも、名だたる槍をおびるプリアモスの民も、すべてが滅び去る日の（ホメロス『イリアス』より）」

トロイアの滅亡を予言するこの唄を、小スキピオは思い浮かべたという。

ローマ人はトロイアを祖国の祖国として特別に思い入れている。

[小スキピオ（スキピオ＝アエリミアヌス）]

将軍にして政治家。大スキピオの養子（当時は養子縁組が普通であった。その背景にあったのは極端に低い生存率）

ローマの富を一身に集めたような大物だったが、同時に、政敵も認める程の勇氣と道義心を有する人物であった。恩人、人道主義者などと称される反面、カルタゴの徹底的な破壊、イベリア半島でのヌマンティア戦争など、冷酷なる破壊者、武功を高めるためなら何でもする帝国主義者、という一面もあった。

（ただし、その人物がいい人だとか悪い人だとか、そういった判断は今となつては決めつけられない。客観的基準など存在しないのだし。その辺の判断は人によって両極端といえる程、食い違ふことが多い）

ギリシア人の歴史家ポリュビオス（アカイア同盟出身）と親交。

ポリュビオスは共和政ローマ時代のギリシアの歴史家。

その間に、小スキピオの厚遇を受け、各地に旅行した（小スキピオの家庭教師だった）ちなみに、第三次ポエニ戦争にも参加している。

「なぜ数多くの都市国家の中でローマだけが最強国になりえたか？」

って感じで普遍史を書いた、という話を再び確認しといてください。

■前 146 年へ -ポエニ戦争と並行して-

[マケドニアの属州化とコリントの破壊]

前 148 年 第 4 次マケドニア戦争

アレクサンドロスの死後、アンティゴノス朝が支配していたが、ローマがこれを破り属州化した。マケドニア王家の役割を受け継ぐローマ。

属州（プロヴィンキア）を設置して管轄→将軍と住民との恩義と信頼関係

アカイア同盟（ポリュビオスはここ出身）は対マケドニアのためにローマと友好関係を築いていたが、マケドニア戦争をきっかけに離反した（・・・多分。

これをきっかけにローマに抑留された同盟要人の身柄返還を要求したが、拒否された。親ローマ派における反ローマ感情が成長する（ポリュビオスと対比！）

前 146 年 アカイア戦争

商工業の一大中心都市コリントの破壊（以来、都市下層民も反ローマ感情を抱くように）

コリントは古代ギリシアのポリスが起源で、交通の要衝に位置し、ローマの商敵だった。この破壊により、いよいよローマの覇権が確立する。

ポエニ戦争とカルタゴの破壊、マケドニア属州化、コリントの破壊。

前 146 年。この年をもってローマが地中海の覇者となった。

“Imperium Romani” の成立である。

5. 地中海の覇者 -内乱の一世紀-

前 146 年に Imperium Romani を成立させた勝者の重荷

(帝政開始は AD27 年だが、実質的には前 146 年にローマの覇権は成立したといっていよい)

都市国家＝農耕市民戦士共同体の限界

S. P. Q. R Res Publica これも所詮は農耕市民戦士共同体にすぎない。

支配領域の拡大に応じて公職者数が拡大。

(最高公職である 2 名のコンスル-執政官-の他にもたくさん増えることに)

そして奴隸制ラティフンディア (大土地所有、奴隸制)

軍の遠征により土地が広がる。広すぎる土地は市民の力だけでは管理できない。

遠征がもたらす捕虜を利用して奴隸労働力を確保 (奴隸制確立)

しかしそれでも管理しきれず荒廃地が増える。

荒廃し手放された土地を元老院貴族などが買い占め、大土地所有制が広がる。

■ Roman Imperialism をめぐって

1) 先手防衛論 (外敵の脅威を跳ね返すため！)

2) 騎士身分層の台頭 (経済力の増大)

3) 平民の不満をそらす (土地所有の機会)

4) 群集心理 (都市大衆社会の形成)

→ 共和政ファシズム＝元老院の指導力＋民衆の好戦的気質

共和政をとりながらのファシズム。リーダーがたくさんいる。

国家の指導層の厚みとそこに求められるカリスマ性

「ローマの元老院は、私には王者の集まりのように見えた」との、ピュロスへの報告。

共和政ファシズムを如実に示している。

■ 内乱の百年

ギリシアの思想と文化が流入 (cf. スキピオ家のサロン、母コルネリア)

カトーなどの国粹主義者がこれに反対した事については既に述べたので省略。

[グラックス兄弟の改革] 前 133 年

Tiberius Sempronius Gracchus (前 162-AD133)

Gaius Sempronius Gracchus (前 153-AD121)

国防力の再建 (大土地所有制を制限して、中小土地所有者＝自作農層を拡大)

「生活が安定した自作農がいないと国防は不可能！」

しかし悪循環に終わってしまった。元老院貴族階級からの反発はいうまでもなく、平民層からも反発を受け失脚。

[党派(factio)の争い] (共和政ファシズムの解体と再編をめぐる混乱)

共和政時代のパトリキとプレブスとの争いとは全く違う。あの頃は平民の力が重大だったので貴族は結局折れるしかなかった。貴族も貴族で、権力とかの傲慢ではなく名誉と勇気の追求のため平民と対立していた。どちらも自分なりの名誉を追求し、どちらもそれなりに満足していた、平和な社会。

しかし今度の党派争いはこれとは全く状況が異なる。

大土地所有制のもと、平民が没落。貴族や新貴族（騎士階級）の力が増大。

閥族派(Optimates オプティマテス)と平民派(Populares ポプulares)との抗争。

これは”内乱”のもととなった。

[マリウスの兵制改革]

志願兵制度の導入。従来の「戦士共同体」を根本から変えようとする試み。

兵士と、その時リーダーだった者との関係が深くなる。

(patronus 親分と clientes 子分の関係が強くなる。地中海世界では強かった)

結果、軍団の私兵化が進む。傭兵制への歩み。

これを背景に有力な統率者が台頭。

■マリウスとスラの抗争

・マリウス（平民派、兵制改革）

人望が厚かった（と思う）が、徐々に猜疑心が強くなり人望低下。

反感をもたれつつ死んでいったかわいそうな人。

非常時には独裁官（ディクタトル）に。

・スラ（閥族派、マリウスと対立）

同盟市戦争で名をあげる。

同盟市「ローマ市民権をくれ！！」

貴族「共和政ローマの精神が失われちゃう！！」

閥族派の立場から、護民官の権力を徹底的に制限。

スラも時に独裁官になったが、「私は王になりたいわけではない」と明言したため反感を持たれにくかった？ディオクレティアヌス帝と同じく、引退して天寿を全うして死んだ数少ない皇帝。

■ 第一回三頭政治（密約による政治）

・ クラッスス（第一回三頭政治）

大金持ち。あくどい金権政治。人間的にはいい人だったらしく、悪口は少なかったという奇妙な特徴をもつ。

・ ポンペイウス（第一回三頭政治）

連戦連勝の武将。スパルタクスの反乱ではクラッススともめた？

反乱勃発時、ポンペイウスはたまたまスペインにいた。クラッススが反乱を鎮圧したのだが、クラッススは本体を叩いただけで実質的に反乱を鎮圧したのは自分だと主張し凱旋式を要求した。

公職につかずして軍団の指揮官、将軍（コンスル）になる。

・ カエサル（第一回三頭政治）

上記二人とは異なり、財力も武功も大してなく、人脈もなかった。

叔母がマリウスに嫁いだため、マリウス率いる平民派と結託した。

（カエサルについては様々なエピソードがあるがとりあえず省略）

以上のことより、カエサルは人間として非常に寛容であり、勇気もあつたため、リーダーとしての資質が備わっていたと考えることができる。

カエサルはポンペイウスとの戦いに勝利した後は終身の独裁官になる。

これは事実上独裁政を認めたということ。

反感をもたれないはずもなく、暗殺される。

カエサルはポンペイウスに勝利した後、ポンペイウス派を許したらしい。しかし、今までの自由を重んじるローマ市民社会はすでに変容していた。許す・許される関係から主従関係が生まれるという、社会の変容がみられる。

■ 第二回三頭政治

カエサルによって後継者に指名されたオクタヴィアヌスと、アントニウス、レピドゥスによる。第一回三頭政治と異なり、公的なものである（第一回は密約による三頭政治だった）

しかし、西地中海のオクタヴィアヌスと東地中海のアントニウスとが対立した。

前 31 年 アクティウムの海戦

オクタヴィアヌス vs アントニウス＋クレオパトラ

あつけなくもオクタヴィアヌスの勝利に終わり、以後オクタヴィアヌスが東西地中海の大覇権を握る。

6. 多神教世界帝国 - 「ローマの平和」 -

オクタヴィアヌスは、カエサルは独裁政を認めたから反感を買ったのだということを理解していた。そのため、元老院と国民による独裁官職を受理せず、アウグストゥスという称号のみを受理した（以下、アウグストゥスと表記します）

cf. アンキウラ碑文（史料集 180-182）

以後、元首政（プリンキパトゥス）へ移行。事実上の帝政開始である。

共和政体の中での元首支配の確立。市民共同体における個人支配の正当化！

形式上は共和政、事実上の元首政、ってこと。権力じゃなくて権威の政治。

そんなアウグストゥスは平和の体現者として讃えられ、多くの「肩書き」が。

[敬虔なる元首としての一面]

宗教人として有名だったカエサルによってアウグストゥスは祭司に任命された。

その後、神祇官・大神祇官と、カエサルと同じ道をたどる。二人とも、「敬虔なるローマ人」という（ポリュビオスやキケロの）示唆の通り、敬虔だった。

アウグストゥスは「平和の祭壇」や「パンテオン（万神殿）」、その他多くの神殿を建立した（パンテオンを建立したのは精密には側近のアグリッパ）

武力だけで世界帝国として君臨することはできない。宗教的意識を喚起する必要があった。敬虔なる市民を率いる、敬虔なる元首。多神教世界帝国としての、ローマ帝国の一面である。

■ ユリウス・クラウディウス朝の皇帝たち

アウグストゥス以後の皇帝たちについて。

1. アウグストゥス

2. ティベリウス

武人としては優れていた皇帝。ただし老齢で、性格的に陰険だった。

このティベリウスの後継と噂されていたのがゲルマニクス（養子）

ゲルマニクスは人望が厚く、教養も深く、人情の人であった。

勇敢なる武将であり、リーダーとしての資質を備えていた。

対ゲルマン人戦（ゲルマン戦線）で大活躍し、市民に大人気だった。

その人気は属州でもものすごく、これがシリア方面でのピソとの対立に繋がり、死に繋がったのでは、といわれている（毒殺がささやかれた）

ティベリウスは終始息子による下克上の恐怖に襲われていたという。
ゲルマニクスが不可解な死を遂げると、毒殺がささやかれた。
一方ティベリウスの方はというと、隠居後、反感を買い惨殺された。
ティベリウス自身有能な皇帝ではあったのだが、性格や人望など、総合的にみてゲルマニクスは「理想的な為政者」であった。民はゲルマニクスの死を悼み、以後皇帝の系譜はある意味ゲルマニクスの幻影にとらわれていく。

3. カリグラ（ゲルマニクスの実子）

若くして皇帝になり、すぐに暗殺される。
ネロと並んで暴君として悪名高かったらしく、記録から消されている。
カリグラもネロも若い。若いと、判断能力に欠けてしまうということか。

4. クラウディウス（ゲルマニクスの弟）

外見上表立っては言えないような（？）大欠陥があったらしい。
バカを装いつつも、ティベリウスが築いた官僚制度を発展させていく。
しかしクラウディウスの最大の欠陥はその女性関係にあった。
皇后メッサリーナが酷すぎた。クラウディウスはその言いなりだった。

5. ネロ（ゲルマニクスの娘アグリッピナの子）

10代半ばで即位。20才過ぎまでは「善帝」だった。
武人ブルスと哲学者セネカが周囲を固める。母であるアグリッピナもなにかと干渉し、ネロは周囲の人物をだんだん疎ましく思うようになる。
そんな環境が彼の暴君化を招いたのかもしれない。

・・・

このように、帝国の系譜は理想的な為政者ゲルマニクスの幻影にとらわれている。それだけゲルマニクスが理想的だったということか。

■ フラヴィウス朝（皇帝権力の継承問題）

暗殺により皇帝がコロコロ変わる事態（前近代は民主主義制度が完成していないため、独裁者を引きずり落とすためには暗殺しかなかった）に対し、ドナウ方面の軍隊に擁立されたウェスパシアヌス帝が即位。

・ ウェスパシアヌス

質素な人物で、つつましく生きてきた。唯一金かけたのが「コロッセオ」

ローマではなぜそれまで大きなものがなかったのか？

→人が集まりすぎると危険だったから。ウェスパシアヌスは平和を機に作ってみたらいい。初の大人数型娯楽施設・・・なのかな。

- ・ ティトゥス

即位後いきなり善人に。偽善者？

- ・ ドミティアヌス

不正が嫌いな皇帝。あまりにも厳しすぎたため反感を買い、その度に粛正をくりかえしたためさらに反感をかうという悪循環を招いた。

元老院と対立し、軍人には人気だったらしい。

■ 五賢帝時代

- ・ ネルヴァ

ドミティアヌス帝暗殺の中心人物。圧政からの解放感。

後継者として養子トラヤヌスを指名した。

- ・ トラヤヌス

属州遠征を繰り返し、彼の時代に帝国版図が最大になる。

- ・ ハドリアヌス

属州遠征を縮小し安定した政治を目指す。cf. 属州視察。

属州視察をきっかけに、帝国の多神教性を再確認したハドリアヌスはパンテオンを再建する。ローマ帝国公認のすべての神々を祀る。

「ひとつの完結した世界としてのローマ帝国」

帝国の安寧・・・皇帝に対する民衆の信頼と畏敬の念。

別荘ヴィッラ・アドリアーナには属州旅行の思い出がつまっている。

- ・ アントニヌス・ピウス

巧みな話術、政治の才。

- ・ マルクス・アウレリウス

「哲人皇帝」 ギリシア語で『自省録』を記す（当時の言語はラテン語だった）共和的独裁を行う。当時はゲルマン民族侵入激化やユーラシア規模の疫病蔓延など、様々な問題があったが、なんとか立て直す。

- ・ コンモドウス

マルクス・アウレリウスの実子で、ダメ息子。以後、衰退・・・

■ まとめ

ローマ帝国は、地中海世界帝国。

オリエン特世界とギリシア世界とラテン世界を統合した。

一神教世界への大転換を経て、ローマは衰退していくわけだが、ローマ帝国史を衰退の歴史と見るのは誤り。ローマ帝国は、一神教への転換という大転換を経て新たな文明の誕生を準備したのだ（イスラム世界・ビザンツ世界・キリスト教世界・・・これらはすべて一神教世界である）

地中海は物質・情報の交換の場だった。まさに文明融和の基盤。
海賊が一掃された穏やかな海は、近代の海域世界のさきがけだった。

ローマは多神教世界帝国であったが、キリスト教はローマ人の元々の敬虔さと
社会不安から来る「救いを求める心」を基盤に急速に浸透していった。
ある意味、ローマにとってふさわしい宗教であった。だからこそ普及した。

共和政ファシズム。敬虔な民と指導者。多神教世界帝国。一神教への転換。
これらのキーワードから、どんなローマ像が浮かんでくるか？
あなたにとっての「ローマ史」とは？

続きは論述で。がんばりましょう。

遅れて本当にすみませんでした…